

前進するOBI——後援会組織の充実

理事・後援会会長 三浦喜代子

『この福音は……勢いをもって、世界中で、実を結び広がっています』 コロサイ1章6節

敬愛する同窓生、学院生の皆様、新しい年 2013 年を《主にあって、その大能の力によって強められ》て、お迎えのことと信じ御名を崇めます。

まもなくあの震災と原発事故の日から2年が経とうとしています。思えばあの時から私たちの国は一変してしまったのではないのでしょうか。単に政治や経済だけでなく、人にとっていちばん大切なところが荒廃、崩壊し始めています。キリスト者である私たちは大きな憂いをもって敏感にこの惨状を察知しているはずです。

しかし、危機の時にこそ強いのが私たちの主イエス・キリストであり、キリストの御霊を宿す私たち主の民ではないのでしょうか。上述の聖句は、故増田誉雄学院長が死の病の苦しみの中にありながら、希望に満ちた笑みを浮かべて、遺してくださったものです。

OBIは開校して22年を迎えようとしています。今、この危機の時に、新しいことが起こっています。

まず、昨年、『学院生会』が発足しました。同窓会、後援会はすでに活動して久しくなりますが、在学生たちの声でもう一つの有機体が自主的に誕生したことはなんと喜ばしいことでしょうか。成長して大人になったOBIを、深く感動しながらまぶしく拝見しました。『学院生会』は、まず、祈祷会をスタートさせたとのこと。また、学院の



諸行事を主催あるいは協力することが主旨だそうです。私たち卒業生は、背後から祈りをもって後輩たちを応援しようではありませんか。

さて、後援会は、同窓会よりずっと後の、今から10年ほど前に、OBIが経済的な苦境に陥り、学院の存続さえ危ぶまれたときに、同窓生の一人である故佐野謙次兄が創設されました。佐野兄は後援会を通して多額の私財を捧げながらOBIを支え続けました。賛同者（卒業生、在校生、教会などの団体）が起こされ、維持会員となり、支援献金をもって今日まで学院を助けています。

昨年末から、後援会の活動をより強固にして、今、再び大きな経済的危機にある学院を支えようとしています。この危機で、使用していた部屋を一つ閉鎖せざるを得なくなりました。後援会はまず、運営委員会を組織しようとしています。すでに大枠が決まりつつあり、次回のレターで詳細をご紹介しますはず。

創設以来現在までの継続活動をご紹介します。アピールさせていただきます。

関連文書を同封しましたが、皆様方にぜひ維持会員になっていただきたくお願い申し上げます。現在、30余名の方々が協力されていますが、OBIを《我が母校》とする方々はすでに180名を超えています。主がお一人一人に志を与えてくださることを祈ります。

OBIは福音の広がりのためになくてはならない機関です。主の御業が《勢いをもって》前進できるように、私たちの手に託されている賜物を用いようではありませんか。

終わりに、皆様方の今年一年が祝され、実を結んでいく日々でありますように祈ります。



去年の夏、東北の旅に出た。

かねてから五能線沿線の海岸の風景は素晴らしいと聞いたので急に行ってみたくなったのだ。

秋田からリゾート白神号という列車に乗って五能線に入り、日本海の海岸線に沿って北上する。車内がすいてきたので、海岸線の景色を見ようと海側の席に移ろうとした。

そこに温厚そうな 60 歳くらいの男性が座って外の景色を見ていたが、私たちを見て、こちらにいらっしゃいませんか、良く見えますよと声をかけてくれた。

しばらくとりとめのない話をしてから「どちらからいらっしゃいましたか。」と聞くと「岩手です。」と静かに答えた。

「岩手ですか。岩手県は大変な災害でしたね。」

「そうです。家も何もかも無くしました。造った製品もみな津波がもって行ってしまいました。」

「それはとんだ災難でしたね。」

「わたしはかろうじて助かったのですが、家内はあっという間に津波にさらわれてしまいました。会社の再建は諦めました。息子たちももういいじゃないかっていうんですよ。息子たちがね、車は危ないから乗るなっていうんです。それでこの汽車の旅にしたのです。」彼の目は力なく遙か遠くの方を見ているようだった。

今まで築きあげてきたものと、そのために労苦を共にしてきた糟糠の妻とも言うべき相手を突然失ってしまった。この喪失感と寂寥感は、陰気な悪性のかびのように私たちの心に入ってくる。わたしは慰めようがなく思わず彼の顔を見た。

彼の顔にこの苦しみに打ち勝とうとする戦いの痕を見、目に積み重なった悲しみの影を見た。わた

しは、奥さんが濁流にのみこまれていく場面を想像した。

「まだ家内の遺体は見つかっていないのです。」とって目を伏せた。

彼の苦しみ、悲しみを思うと心が揺さぶられて、慰めの言葉が見つからなかった。

なまじっかな慰めの言葉や励ましの言葉はいわなくて、ただそばにいて黙って相手の言うことを聞いてあげるのが最善だと教えられていた。

何故このようなことが起きたのだろう。何故避難することが出来なかったのだろうか。何故妻は助からなかったのか。何故わたしの人生にこんな苦しみが起きたのだろうか。これは神が下した罰なのだろうか。そうだとするなら、こんな大きな苦しみを受けるほど、わたしは罪を犯したというのか。いや神は関係ないのではないか。

彼の頭の中で「なぜ？」という問いかけが、次から次へとわき出てきて、堂々巡りをして彼を苦しめたのではないだろうか。

わたしはヨブの災難を思った。(旧約聖書ヨブ記、神の前に正しく平安に暮らしていたヨブに突然数々の耐えがたい災難がふりかかってくる。ヨブは神に問う。何故このような災難が次々にふりかかるのか？なぜ神は答えてくださらないのか？

時が満ちて、神は別の方法でお答えになった。それはイエス・キリストの十字架であった。)

次の五所川原駅で私達の列車は前後二つに切り離されることになり、彼は前の方に移っていった。しばらくして私達は彼とこのまま別れてしまっただけではないのではないか。もう少しでも寄り添っていたほうがいいのではないかと思わされた。彼を捜して「旅のついでにいつでもお寄りください」と連絡先を書いたメモを渡した。

それから3か月ばかり経ったある夜、電話が鳴った。

「先日は五能線でご一緒になりまして、わたくしのようなものの話を良く聞いてくださりありがとうございました。今、北陸の方を旅しています。あの時のことが思い出されて、懐かしくなってお電話した次第です。ひとことお礼を申し上げたくて、突然でご迷惑かと思いましたが。」

あの時よりも少し元気な感じだった。彼の名前と住所をきいた。

仮設住宅に一人で暮らしているという。

近いうちに便りを出そうと思った。
東北の復興と被災された方々のたましいが癒されることを祈りつつ。(おわり)

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイの福音書十一章二十八節)



OBI 研究科 状況報告

研究科世話役 中島總一郎

OBI 研究科がリサーチコースとして続けられて 21 年になります。毎年研究テーマが異なり、2012 年度は、前期はベテラン牧師による講義で、「牧師にとっての有益な信徒像」であって、あらためて知られることが多々ありました。後期は研究生の発表が中心で、「死海写本の周辺知識」、「『文章を書く』ということ」、「教会開拓の報告」、「私の伝道」などでした。世良田学院長による「新約聖書の成り立ち」もありました。参加者は毎回 10 名前後です。

本コースは毎月 1 回 (8 月と 3 月は除く) 第三木曜日 13:30 ~ 15:00 に OCC ビル内の部屋で開催され、受講料は半期 5 回で 8000 円 + 後援会協力献金 (一口 1000 円) で、一回 2000 円での聴講も可能です。OBI 卒業生が中心ですが、公開講座方式を採っており、関心のある教職、信徒の方々も参加可能です。

研究発表は強制ではありません。OBI 卒業生各自が今までに研究してきた事柄の発表の場であって、それによって参加者相互が啓発し合い切磋琢磨して卒業後の信仰知識レベルを更に高め、研鑽を積むことが目的です。

したがって、研究発表を希望しない方でもその旨

を明らかにして自由に参加できます。

本コースには毎年指導教師と世話役が立てられ、ここ数年は世良田学院長が当たって下さっています。世話役は研究科生が担当で、2011 年、2012 年度は中島總一郎でした。

講義や発表の後には毎回質疑応答があり、内容確認や信仰活動への適用を深める有意義な時間となっています。

2013 年度のメイン・テーマは現在未定ですが、引き続き開催されていますので、皆様、是非奮って参加して下さい。お待ちしております。

学院生会の発足によせて

学院生会会長 高沢 茂雄

主の御名を賛美いたします。
学院生会の発足のお話を最初に聞いたのは、2012 年の 5 月頃だと思います。「学院生会を、組織し学院生のよりよい学びの環境と OBI の教育サービスの充実を図ることを目的とする」ことが趣旨でした。

学院生会役員として、山本兄、鬼京姉と私の三人が選出されました。初めは何を行えばよいのか戸惑いましたが、教務の福井先生のご指導のもとに少しずつ理解し、進めることができました事に感謝しております。学院生会の一番の行事は、クリスマス感謝会で 2012 年度クリスマス感謝会は、学院生会が中心で企画、構成し、プログラムの作成にあたりました。しかし、その背後では、福井

先生をはじめ諸先生方や学院生の皆様にささえられて、無事に開催できましたことを心から感謝しております。しかし、反省点も沢山ありますので、それは次期役員さんに託し、今後の学院生会がますます主に用いられることを期待し、希望してやみません。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」

ヨハネ 15：7

訂正のお知らせ

前号 (33 号) 3P 田中恵子姉のあかし「母の洗礼」の文中の引用聖句箇所に誤りがありましたので、下記により訂正させていただきます。

「わたしは、決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」ヘブル 13：8

→修正：「わたしは、決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」ヘブル 13：5

編集後記

2013 年を迎え、東日本大震災も 2 年前のことになりました。

月日の経過とともに、当時の記憶が薄らいでゆきます。

そんな折、加茂兄から、昨年、東北の旅の途中、震災体験者との出会いがあり、あらためて震災のことを考えさせられたとの一文を送ってくださいました。

ニュースレターへの掲載を了解していただきましたので、今号に掲載させていただきました。

被災の傷は、まだまだ癒されていないことが伝わってきます。

祈りの課題です。

前号でお知らせしましたように、今、OBI は財政的に困難な状況にあります。

OBI の働きを継続するために、学院、理事会、後援会が祈りつつ対策を講じております。

同窓会も昨年 12 月、OBI への協力金として、20 万円お渡ししました。

これからも同窓会は、できる限りの協力を致したいと思っております。

私たち同窓生は、OBI のために毎日祈って支えてまいりましょう。